

が、他の人の原稿を事前に読めるといふ利点もあります。編集委員会は年間四回を予定しています。現在、会誌二二三号「史談会六十周年を迎えて」を作成中です。

佐伯史談会発足六十周年によせて

本年は、佐伯史談会結成から六十年目にあたります。前号で会員各位に御案内し、「六十周年を振り返って思う事・感じた事」を綴ってもらいました。会員の皆様から頂いたお手紙を紹介します。

創立以来の会員 佐伯市狩生 上杉清喜

★私は今年九十六才になりました。史談会誌を見るたび昔の会誌を思い起こします。

故羽柴先生手書きの談史には、ほのぼのとしたぬくもりを感じます。

目を閉じれば、在りし日の事どもが、そぞろ想い浮かばれ、合掌の思い、ひとしほ切なるものがございます。佐伯史談 長い間有難うございました。

佐伯市匠南 戸山恵子

★私が、佐伯史談会の小冊子に出会ったのは、中学校の文化祭でした。郷土の歴史コーナーで手に取ったガリ版刷りの本。でも、とても読みやすく、内容も盛りだくさんで



最近の会誌「佐伯史談226～231号」

した。中学、高校と図書室の一角に置いてあり、一冊ずつ増えるごとに読んでみるのが楽しみでした。父から聞いていた堅田合戦の話や佐伯惟治父子の悲劇、お為半蔵の物語等々、活字になってみて改めて理解出来ました。社会人になり正式に会費を払って入会したのが二十歳位でした。もう、四十年になるんでしょうか。

結婚してからは、育児に仕事、そして今は介護と、少し忙しい毎日ですが、その間、きちんきちんと毎回届く「佐伯史談」。届けてくださる方、編集してくださる方、そして、研究発表して下さる方、有難うございます。

会員の諸先輩の皆様とは、なかなか言葉を交わす機会が持てず申し訳なく思っています。尊敬する先輩の方々、中でもとりわけ強烈な思い出は、故平川マサ様との出会いと別れでした。

最初の出会いは三十代後半、私の投稿した文章に厳しいご指摘を受け、一文一文に何かわけのわからない難癖をつけるのです。若さもありません。そうでなくても生かすのは会費のみにしようと思いました。そうでなくても生活そのものが超多忙になりました。二十年近く過ぎた頃、八十代も後半になった平川マサ様と介護の現場で再会し

たのです。ご自宅を訪問すると仕事もそこそこに、郷土史やお部屋の中に積まれている本を出してきて見せて下さいました。

私がマサさんの親友「ハル」さんの姪だとわかると、まるで実の娘に接するような話し方になられて、私の方が家事を教えることもありました。自宅での生活を頑張っておられたマサさんでしたが、ついに入院し、そして施設での生活となったのです。お見舞いに伺うと、その枕元には必ず「佐伯史談」がありました。

そして、久しぶりの私の投稿を喜んで下さり、ニコニコ笑いながら「これを書いたのが、いつも来てくれる戸山さんなんですよ。」と言って、病院の先生方に見せたと聞いていました。「あなたの文章、わかりやすいわ、それが大切なのよ、他人が読んでわかるのが一番」とも言われて、びっくりするやら、嬉しいやらで……。

平川さんも年を取られたのか、丸くなられたのか、それとも……これが認知症というものなのか……。

私の文章を受け入れて下さったことで、長い間一方的な私のわだかまりも消え去り、それから数年、お亡くなりになるまで担当させて戴いたことに感謝すらしています。

す。

「目的を持って書いた事ですからね、その努力は立派ですよ。内容より過程ですよ。読む人も書く人も、郷土愛でいっぱいなんだから大丈夫、自信を持っていいんです。」
他人にも自分自身にも厳しかった平川マサ様の最後の言葉を、今もしっかり受け止めています。

佐伯市戸穴 染矢寛二

★子供の頃、村のおじいさんから、裏山の頂上に昔、城(河波ヶ城)があったんだと聞いた事がありました。近所の友達や弟らと、その山に登ってみようと決め、ミカン畑の脇道を通り、急な斜面に足を滑らせながら到着した。山頂は水平になっており、草むらの中に小さな祠が置かれていました。ちょうど霧がかかっており、何やら鎧武者でも出そうな気がして薄気味悪くなり、慌てて山を下ったという思い出があります。

それから数十年、「あの場所は何だったんだろう」と調べてみたのが史談会の本であり、史談会参加への始まりでした。

佐伯の若い人はよく「佐伯は小さな城下町で、あまり歴

史もなく、有名な人も少ない」と思っています。

歴史の教科書には載らないけれど、結構重要な場面に関係があり、また、スポーツ界でも活躍している人も多い。一生懸命、勉強・スポーツに努力すれば日本を動かすような人にもなれる。オリンピックにも出れるんだからということ、子ども達に気づいてもらうのも史談会の力かなと思います。これからも頑張ってください。

佐伯市新女島 丁田健太郎

★佐伯史談会は、昭和三十三年「鶴岡郷土史研究会」として発足し、昭和四十年「佐伯史談会」と改称して機関誌の発行や研究発表、講演会など開催し、市民に伝えながら佐伯の歴史を探求する活動を続けています。城に興味を持ち、佐伯に移住して二十年、佐伯城の石垣を調べるうち、石垣の複雑さやその構造に驚愕し、四百年の歴史を刻んだ石垣を築造した先人達の技術力に改めて感動しました。

穴太積あのおづみという石垣の積み方を研究し、なぜ強度が四百年も保たれるのか知りたいと思ひ、資料を調べるうちに、いろいろな事を学ぶことができました。

滋賀県大津市坂本は、比叡山延暦寺と日吉大社の門前

町として発展してきました。この地に穴太あのをという地域があり、ここに住んでいる人々を穴太衆あのをしゅうといいます。もともと古くから五輪塔の切り出し加工を行っていた石工いしく集団です。

織田信長が安土城の築城に穴太積の石工を使って石垣を作らせました。その技術力に大名たちは驚き、自分の城の築城に穴太積の石垣を作らせたとあります。

佐伯城は、近世で最後の山城ですが、典型的な遺構は貴重です。佐伯城築城は、姫路城の石垣を施工し、穴太積の技師であった羽山勘右衛門うやまかんえもんに作らせましたが、出来栄えの事で藩主毛利高政と意見が対立し鉄砲で討たれたと言われています。

私は石垣の研究を、まだまだ深掘りしていきたいと感じています。

佐伯市新女島区 伊東義和

★昭和三十三年「鶴岡郷土史研究会」と同じ頃に発足した旧市内の「佐伯史談会」が、昭和二十九年頃に発展的に統合・強化され、現在の「佐伯史談会」として再発足されたそうです。(佐伯史談会五十周年記念誌 図説新佐伯誌巻頭言より引用)

私は四十年間、別府の九大病院で臨床検査技師として検査業務を担当し、微力ながら地域医療に貢献こうけんしてまいりました。平成二十一年三月、無事定年退職しました。

在職中は歴史とは程遠い職種でありましたが、歴史に興味を持つきっかけは、大田村出身の妻の先祖が大友宗麟の一族(家臣)で、吉弘統幸よしひろむねゆきと関係があった事でした。勤務していた病院の道路をはさんで石垣原古戦場跡が見えます。杉乃井ホテルの上手は、大友氏と黒田氏の激戦地であり、「大友本陣を守る会」というお祭りがあります。私たちは毎年招待され、妻と一緒に参加して参りました。和尚さんの読経が終わった後にする御焼香もいつも一番先でした。これ等からも妻の先祖は吉弘統幸かなと思っていました。

定年後、佐伯に新居を構えました。出身は蒲江町猪串で

すが、「井の中の蛙」で蒲江の事も知らないことが多かったのです。佐伯の歴史を勉強するため、知人に誘われて、平成二十三年に佐伯史談会に入会しました。佐伯の歴史については各種研究会や会員研究発表会、文化講演会などでいろいろと学ばせて戴きました。

平成二十七年、当時の事務局長（故神田稔氏）が体調を崩し、「誰か事務局長を担当してくれる人はいないか。」と人を探していました。その時、知人の紹介もあり私が推薦されました。事務局長を受ける人がいないのなら、勉強する絶好のチャンスと思い引き受けました。現在四年目ですが、会員の皆様に支えられて職務を果たすことができ、感謝しております。

現在の史談会行事は、年二回の史談会会誌の発行、日帰り研修（市内・県外）の実施、会員研究発表会、歴史ロマン探検隊の実施等々、歴史ロマン探検隊では一年前から佐伯市内の文化財探訪を行っています。

また、佐伯招魂所（西南戦争の官軍墓地）の清掃ボランティアも年五回実施しています。

今年、歴史資料館主催の「郷土の歴史教室」で佐伯招魂所の見学研修（十月二十五日）が計画されています。歴史

教室の受講生、佐伯史談会、市民三者による共同研修です。一人でも多くの人々に参加していただきたいと思っています。一人でも多くの方が見学に来ていただけるとうれしいです。よろしくお願いします。

最後に佐伯史談会は、佐伯の文化財調査・研究する唯一の学術団体です。皆様方のご協力よろしくお願いいたします。

佐伯市女島 吉田勝重

★六十周年目を迎えて、今、佐伯史談会はこの過渡期を迎えようとしています。

この十年間で会員数は一二三名減の一八八名となっています。会員の高齢化に伴う病氣療養・介護施設への入居、逝去等による退会、あるいは研修意欲の減少による研修視察等への参加者減少等が目につきます。

これまでのように各地を巡る文化財探訪や新規に創設した歴史ロマン探検隊の実施、佐伯市歴史資料館と共催の郷土歴史教室の開催、従前の研修を基に新たな実践に試みていますが、なかなか会員減少のはじめにはなっていないようです。なにか良い方法はないものだろうか。

先輩方々の御意見を是非拝聴したいものです。よろしく
お願い致します。

六十周年と復刻版 佐伯市狩生 野々下 静

★佐伯史談会六十周年記念おめでとうございます。

私は今、小冊子である「佐伯史談」の復刻版(一)に目を
通しています。

『佐伯史談』第一号創刊について』の前文には、「佐伯史
談第一号をお届けいたします。これは私共、佐伯史談会の
機関紙であります。佐伯史談は鶴岡郷土史研究会の発展
成長したものと受け取り願いたい。」として「佐伯・
南郡を包括する史談会である。」と記され、昭和四十年一
月二十五日の発行となっています。

第一号には、宇藤木の宝篋印塔、堅田の千人塚、お為半
蔵口説など一字一字を手書きしたガリ版刷りの冊子であ
ります。そして、会計報告、最後に会員名簿を記し、そこ
には佐伯、南郡の各界・各層の先輩諸氏の百名近い会
員・会友のお名前が記載されています。

当時の調査・研究はすべて自転車で走り回っていたと
お聞きしています。この六冊の復刻版には、佐伯南郡の

膨大な歴史的遺産等の調査資料を拝見することができ、
諸先輩の並々ならぬ情熱と苦勞を伺うことができます。

佐伯史談会六十周年記念にあたり、私たちは諸先輩が
築き上げてきた、この長く重みのある歴史の上に立って
いると思っています。

私たち佐伯史談会は、これからも会員相互の信頼の基
に、先人が遺した佐伯・南郡の素晴らしい歴史遺産であ
る神社仏閣をはじめ、遺跡等の調査資料を市民と共有し、
未来に継承していきたいと思えます。

最後に、佐伯史談会のみなさんの指導を受け、史談会の
今後の発展に微力ながらお手伝いをしていきたいと思っ
ています。

★会員の皆様へ、

「佐伯史談会への思い・考え」の原稿をお寄せいた
だきありがとうございます。